

《 批 評 》

「責任」と「合意」の行方

—高大連携歴史教育研究会運営委員会「高等学校歴史教科書・大学入試出題用語精選基準に関するアンケート集計結果について」特に「5. アンケート結果に基づく 高大連携歴史教育研究会からの提案」と「3. 自由記述の概要」から—

向 野 正 弘

はじめに

最近病気がちで、病院や医師と接することが多い。いわゆる「藪医者」と言うものの存在を理解できるようになった。恐らく、これからもっとよくわかるようになるのだろうけれども、何となく二つのタイプがあるように感じた。一つは、見立て違い。一生懸命やってくれるのだけれども、根本の原因を見誤っているので如何ともしがたい。もう一つは、患者を見ない。原因は突き止めている。見立てに間違いは無いのだけれども、患者の個々の状況を見ようとせず、血液検査の結果とパソコンしか見ない。どちらも自信を持っているだけに、患者としては対処のしようがない。「藪」の「藪」たる所以は、自身を「藪」だと認識できないところにあるようでもある。この二タイプの梯子で危ういところまで追い込まれた。思わぬところから解決の糸口が解けて、最悪の事態を脱することができたが危ないところだった。

そんな感慨に耽っていたところ、世界史未履修問題に端を発する暗記批判、その後の用語精選の流れも同じ様なものではないかと思えてきた。評者の見るところでは、そもそも世界史未履修問題を暗記批判に結びつけたところに無理がある。見立て違いである。学術会議が火付け役で、バトンは高大連携歴史教育研究会へと移されて行く。高校歴史教育の実際に精通した方達もいるというのに、実態を見ようとしているように思えない。地を這うような実践の上に提起されるならまだしも、余りにも空虚な「メタ認識」に刈り取られようとしている¹。その上で「二匹目のドジョウ」を狙ってアンケートだという。その結果は無残である。おそらく、問題点を理解せず、うまく切り抜けたと考えているようで、次の課題に取り組もうとしているらしい。「藪」はまったく迷惑である。

さて、そんな心境で、高大連携歴史教育研究会運営委員会「高等学校歴史教科書・大学入試出題用語精選基準に関するアンケート集計結果について」(2018.3)²を拝見した。基本的には、「シンポジウム：歴史教育の未来を拓くⅢ—歴史教育改革の具体像—」(2018.3.21、於日本大学文理学部)に関する拙評において取り上げており³、改めて論じることもないだろうと思っただが、やはり指摘すべきは指摘しておくべきだろうと考えた⁴。ここでは「5. アンケート結果に基づく 高大連携歴史教育研究会からの提案」と「3. 自由記述の概要」に検討を加えたい。

1. 「責任」の行方をめぐって

今回のアンケートは、高大連携歴史教育研究会運営委員会（以下高大研と略称）だけでなく、日本歴史学協会歴史教育特別委員会（以下日歴協と略称）・日本学術会議史学委員会高校歴史

教育に関する分科会（以下学術会議と略称）の共同して呼びかけたものである⁵。したがって、日歴協・学術会議も共同して責任を負うべきものである。しかしそうではないらしい。「はじめに」で、

ただ、高大連携歴史教育研究会が、高等学校で現在教えられている世界史Bと日本史Bの用語精選第一次案を、アンケート調査の参考資料として同時に発表したため、3者によるこのアンケート調査が高大連携歴史教育研究会の用語精選第一次案への意見を問うものという誤解が生じ、他の2団体に大変ご迷惑をおかけしたことを心からお詫び申し上げます。

と述べる。高大研は「お詫び」する相手を間違えているのではないか。迷惑を被ったのは、振り回された回答者や変な心配をさせられた一般の人々だと言うことを理解していない。あくまでも「誤解」で押し通そうとする。もしも「用語精選第一次案を、アンケート調査の参考資料として同時に発表」することを、学術会議や日歴協の関係者がまったく知らず、了解も得ていなかったというのなら、「暴走」とでもいふべきであろう⁶。そのようなのであれば、理解に苦しむのは、

このアンケート結果の集計や自由記述部分の要約は、高大連携歴史教育研究会運営委員会の責任で行いましたので、報告書も高大連携歴史教育研究会運営委員会名でまとめさせていただき、日本歴史学協会や日本学術会議に報告させていただきます。

と述べていることである。三者で呼びかけて、高大研が「暴走」したのなら、まとめを高大研だけでやるということはあるまいだろう。そもそも日歴協と学術会議は、報告される側ではなく、広くアンケートを呼びかけた側であって、報告する責任を有すであろう。

この間の経緯を示すものが「アンケート結果に基づく高大連携歴史教育研究会からの提案」の末（全体の末にも当たる）に注記する「作成経過」で、

2018年2月末にアンケートの回答が締め切られ、集計に入った。3月15日にアンケートを呼びかけた日本学術会議史学委員会高校歴史教育に関する分科会（現在は中高大歴史教育に関する分科会に改称）、日本歴史学協会歴史教育特別委員会、高大連携歴史教育研究会（以下、高大研と略称）の3者が会合をもち、アンケート結果の報告書は、集計を行った高大研の責任で行うことで合意した。高大研の運営委員会では、アンケートの集計結果とともに、アンケート結果で明確になった用語精選基準に関する高大研としての提案を報告書に追加することとし、その大筋を、3月21日に日本大学文理学部で行われたシンポジウム「歴史教育の未来を拓くⅢ」での桃木至朗報告でおこなった。

と述べる。3者の合意した「アンケート結果の報告書は、集計を行った高大研の責任で行う」というのは、高大研の強引さと学術会議・日歴協の無責任さを示すものである⁷。3月15日（木曜日）の3者の「会合」はどのようなものだったのか。平日に、いつ、どこで、どのようなメンバーが会合して決めたのか。極めて興味深い。そもそも3月21日（水曜日、春分の日）に報告するのである。わずか一週間前に「合意」して動き出すなどということがあろうか。高大研のHPは、シンポジウムについての案内を、2018年2月17日（土曜日）に掲示しており⁸、さらに先だって計画的に進められていたことは明らかである。記されている通りならば、高大研は、了解も受けずに進めていたということになるであろう。

学術会議・日歴協には、報告書に対する責任はないのか。学術会議・日歴協は、高大研の「暴走」を制御しなければならないのに、そうした責任を放棄した。

その結果、

その後、アンケート結果の階層別集計結果がでて、大学入試の出題用語を高校教科書の本文用語に限定する案が、高校と大学教員に限ると、過半数を超えていたことが判明した。そのため、高大研の提案の中に、用語精選基準として新たに追加することはしないが、その事実の指摘を追加することにした。また、自由記述で目立った事項については、アンケート項目になっていないので、過半数の意見として認定し、精選基準に入れることに疑問が表明されたので、別途、二つの検討事項として扱うことにするとともに、評価の対立する用語の取り扱いの説明に、学問的成果に基づくことや外国の評価も取り入れる点などを追加した。

以上の変更を高大研の運営委員会として4月10日に承認し、最終報告として確定した。

と述べているように、後は高大研の内部処理で済ませている。評者の見るところでは、日歴協や学術会議は、果たすべき役割を放棄した責任を免れないであろう。

改めて「高等学校教科書および大学入試における歴史系用語精選の提案」（第一次）（高大連携歴史教育研究会、2017年10月）「Ⅲ アンケート調査と用語精選第一次案との関連」を確認すると、

今回、日本学術会議高校歴史教育分科会、日本歴史学協会歴史教育特別委員会、高大連携歴史教育研究会運営委員会の3者で実施するアンケート調査は、高等学校の歴史系教科書や大学入試の出題における歴史用語をどのように精選したらよいかの基準を明確にするためのものです。**この用語精選における基準に関して大枠での合意が形成されれば、それを公表し、**それを参考にして高等学校の歴史教科書や大学入試における用語の選定が進むことを期待しています。

と記している。つまり学術会議・日歴協・高大研の三組織は、「大枠での合意が形成されれば、それを公表」するとしていたのである。ところが「合意」は形成されず、高大研の「責任」でまとめて公表してしまった。こういうやり方をすれば「合意」の形成などできるはずはないだろう。また合意無き「提言」は、本来有すはずであった権威を有し得ない。

2. 「5. アンケート結果に基づく高大連携歴史教育研究会からの提案」の問題点

さて、高大研において、「合意」形成よりも優先させた「提案」とはどのようなものなのか。評者は「アンケート結果」に拘り、徹底的に検討したのなら、問題の多いアンケートでも、少しは価値を増したと思う。しかし「アンケート結果に基づく」という「看板」には、偽りがあるように感じてならない。「アンケート結果」に基づいたものとは思えないような、思いつきのような「提案」を滑り込ませている。

ここでは、アンケート結果に依拠したと思えない箇所の問題点について検討してみたい。まず全体的な考えとして、

次に、高大研がアンケートの参考資料として提起した用語精選第一次案に対するマスコミの報道やそれに触発されたアンケートへの自由記述の動向についても検討する必要がある。**これらの自由記述は、アンケートの項目になっていないため、多数意見になっているかの判定はできないが、多くの人々が関心を示した事項であることは間違いない。**それ故、**今後の用語精選のための検討事項として、問題点とともに、指摘して、関係者の皆さんの参考にしていただきたいと考える。**

と述べる。ここで前掲ではあるが「はじめに」において述べている内容を確認し、比較的に検討しよう。「はじめに」では、

ただ、高大連携歴史教育研究会が、高等学校で現在教えられている世界史Bと日本史Bの用語精選第一次案を、アンケート調査の参考資料として同時に発表したため、**3者によるこのアンケート調査が高大連携歴史教育研究会の用語精選第一次案への意見を問うものという誤解が生じ、他の2団**

体に大変ご迷惑をおかけしたことを心からお詫び申し上げます。

と述べる。「誤解」であるというならば、分析に際して除かねばならないだろう。評者のように「誤解」した人もいれば、「誤解」しなかった人もいるだろう。また「誤解」なのだから、そもそもアンケートには関係ないだろう。ところが「アンケートの項目になっていない」「多数意見になっているかの判定はできない」という判然としないものであるとの認識を示しながら、なぜか「多くの人々が関心を示した事項であることは間違いない」と断定して、議論を進めていく。マスコミに取り上げられたことを言うのならば、その影響を分析して論じるべきなのに、そうした論述にはなっていない。通常こうした場合には、再度きちんとアンケートを取り直して、その上で論じなければならないのではないか。要するに目指すのは「今後の用語精選のための」布石を打とうということのようである。この「今後の用語精選のための」布石は、周到に計画されたものである可能性がある。というのは、前掲注記部分に、

その後、アンケート結果の階層別集計結果がでて、大学入試の出題用語を高校教科書の本文用語に限定する案が、高校と大学教員に限ると、過半数を超えていたことが判明した。そのため、高大研の提案の中に、用語精選基準として新たに追加することはしないが、その事実の指摘を追加することにした。また、自由記述で目立った事項については、アンケート項目になっていないので、過半数の意見として認定し、精選基準に入れることに疑問が表明されたので、**別途、二つの検討事項として扱うことにするとともに、評価の対立する用語の取り扱いの説明に、学問的成果に基づくことや外国の評価も取り入れる点などを追加した。**

以上の変更を高大研の運営委員会として4月10日に承認し、最終報告として確定した。

と述べ、「その後」すなわち、3月15日の3者会合、3月21日のシンポジウムの後に加えているのである。まず学術会議・日歴協を外し、ついでシンポジウムで「最終案」として新聞にも報道させて、その上で少し期間をおいて差し込んだのである。

差し込んだ内容は、「二つの検討事項」と「評価の対立する用語の取り扱いの説明」である⁹。「二つの検討事項」とは、「TVドラマや歴史小説などでよく知られた人物の取り扱いの問題」と「評価の対立から削除を求める自由記述が寄せられた用語の扱い」であり、後者の「評価の対立する用語の取り扱いの説明」では、「学問的成果に基づくことや外国の評価も取り入れる点など」を追加している。

具体的に見ると、まず、

その第一の検討事項は、TVドラマや歴史小説などでよく知られた人物の取り扱いの問題である。第一次案では大学入試で知識として出題対象とする「基礎用語」からは除外し、資史料やコラムなどの「発展用語」で取り上げられることを提案したのであったが、マスコミでは教科書から特定の人物が消えるといったセンセーショナルな報道が行われたため、アンケートの自由記述では、国民的な関心と呼んでいる歴史上の人物を積極的に取り上げるべきとの意見が多数寄せられた。確かに、ドラマや歴史小説などを通じて国民的な教養と見なされているような人物については、史実との違いを考えさせる課題なども用いながら、歴史への関心を喚起する手がかりとすることが有益と思われる。それ故、「国民的な関心と呼んでいる人物や事件については、厳選した上で、史実との違いを示すなどして、生徒の歴史への関心を喚起する手がかりとする」ことも検討に値すると思われる。ただし、「国民の関心と呼んでいる人物や事件」の判定をどう進めるか、史実との関係をどう確定するか、など今後さらに検討してゆく必要があるだろう。

と述べる。これは、批判の意味をよく理解していないのではないだろうか。大岡越前も出ているのだから、遠山の金さんも出せとっているわけではないだろう。坂本龍馬を「TVドラマや歴史小説などでよく知られた」人物、ファンだから残して欲しいという方もいるだろうが、質

易・商社など、近代的、国際的な経済人像の萌芽として意義を認めている方が多いのではないだろうか。歴史上の意義をきちんと押さえて欲しいということだと思ふ。そうした思いを踏みにじるようなことを敢えて書き加える理由がわからない。

ついで、

第二の検討事項は、第一次案に収録された用語の中で評価の対立から削除を求める自由記述が寄せられた用語の扱いに関係する。歴史用語に関しては、政治的な対立を呼ぶ場合が多々あるが、その対立はあくまで学問的で、実証的な裏付けの下に議論されることが重要であり、歴史教育が政治的に歪められることがないような配慮が必要であろう。そうした考えからつぎのような原則が重要になると思われる。

つまり、「歴史教科書の用語やその説明は、政治的な配慮で歪められることなく、あくまで学問的な成果に基づくべきである。また、学問的な評価が分かれる場合には、特定の見解だけでなく、多様な見解を示して、生徒が事実に基づき、多面的・多角的に理解し、考察できるように配慮する必要がある。また、今後、歴史教育の分野でも、外国との交流がますます活発になることが予想されるので、一国の見解だけでなく、外国の見解も示して、生徒が多面的・多角的に理解し、考察できるように配慮することも大切である」といった原則も今後、検討に値すると思われる。

ただし、学問的な成果を教科書に反映させる場合、学問的成果をどのような場で、どのように反映させてゆくべきか、については、今後、さらに検討してゆく必要があるだろう。

と述べる。「つまり「……」といった原則も今後、検討に値すると思われる」というのは、極めて技巧的な表現である。このカギ括弧内に、方向性を示している。アカデミズムの歴史学の立場から言えば、「その対立はあくまで学問的で、実証的な裏付けの下に議論されることが重要であり、歴史教育が政治的に歪められることがないような配慮が必要」ということで十分であろう。しかしそこから異なる原則を提起する。まず「学問的な評価が分かれる場合には、特定の見解だけでなく、多様な見解を示して、生徒が事実に基づき、多面的・多角的に理解し、考察できるように配慮する必要がある」という。「学問的な評価が分かれる場合」というのは、専門家でも難しいということである。「多様な見解を示すことは可能だろう。しかし「生徒が事実に基づき、多面的・多角的に理解し、考察できるように」なるとは思えない。

実は、主たる提起は、その後の「一国の見解だけでなく、外国の見解も示して、生徒が多面的・多角的に理解し、考察できるように配慮することも大切である」という箇所であろう。「実証的な裏付け」や「学問的な評価」は吹っ飛び、「一国の見解」と「外国の見解」という非歴史学的なものを前面に押し出している。ここでも「生徒が多面的・多角的に理解し、考察できるように」求めているが専門家もできていないことを求めること自体無理である。

こうしたものをむりやり持ち込んだ理由は、高大研の志向と密接に関わっているようである¹⁰。アンケートの記述には、一見すると相反するように見える志向が示されている。「v)その他の基準があれば、記入してください。」の「C. 関連した自由記述の概要」(p. 27)をみると、

- 1) イデオロギーを排除した、公正中立な用語精選を(14)
- 2) 事実に基づかない用語は除外すべき(38)
- 3) 評価が対立する事項は両論併記すべき(5)
- 4) 自虐でなく、日本人として誇りをもてる内容を(14)
- 5) 加害の事実も教えるべき
- 6) 検定意見ついた用語は削除すべき
- 7) 外国のプロパガンダに同調すべきでない(12)
- 8) 社会人や生徒の常識に反する用語精選には反対(6)
- 9) 日本の公式見解に基づいた精選を(3)
- 10) 地域観光に役立つ人物名は残すべき
- 11) 選抜者の思想による偏った精選は止めるべき(3)

- 12)日本人として知っておくべき用語は残すべき(10)
- 13)精選には多様な立場の人間があたるべき
- 14)評価が対立する用語は除外すべき

となる。一応10意見以上のものをゴシックとしてみた。私見では、2・1を、「事実」に基づき「イデオロギー」排除を求めるもの、4・7・12をナショナル=アイデンティティーのあり方に配慮を求めるもの、と分けることができると考える。私見では、この両者は、決して相反するものとは言い難い¹¹。また「その対立はあくまで学問的で、実証的な裏付けの下に議論されることが重要であり、歴史教育が政治的に歪められることがないような配慮が必要」ということで十分である。しかし高大研では、敢えて「一国の見解だけでなく、外国の見解も示して、生徒が多面的・多角的に理解し、考察できるように配慮することも大切である」という方向性を明示するのである。広く「合意」形成を求める立場を投げ捨てて、対立を求める立場を鮮明にしているように見受けられる¹²。

3. 「3. 自由記述の概要」を拝見して—「文化史」に関する意見を中心に—

「自由記述の概要」を拝見した。貴重な意見の集積である。一人一人の回答者の背負っているものがほの見える。ただそこまでなのである。なぜそのように考えたのか。たとえば、その意見を記した方は、教員なのか、研究者なのか、その他の方なのか、知りたいと思う。たとえば教員だとして、どのような学校で、どのような教育課題に直面しているのかを知りたい。また何歳ぐらいの方なのか。男性なのか、女性なのか。その方を知れば知るだけ、より良く理解できるであろう。高大研としては、基礎データからもう少し具体的に把握できているであろうが、そこまで踏み込んで公表する前提、分析する前提ではなかったであろう。したがって「ご案内」ということになったのだろう¹³。

一人一人の方の置かれた立場、背景を踏まえずに論評することは妥当ではないと感じる。しかし、そうした意見に寄り添ったまとめをすることもできたのではないか。評者は、高大研の提案には、そうした配慮に欠けるものがあると考え。ここでは、文化史用語について検討してみたい。高大研の提起は次のようである。

6)文化史用語の考え方

「読んだことのない文学作品」「作品を読んだことのない作家の名前」などを「学んでおくべき基礎知識ないし教養」と見なす考え方を、入試と教科書の両面で排除すべきである。

特に問題なのは、政治史や経済史と比べても、「教養」の内容が古いままであるケースが多い点である。これまで断片的にしか扱われなかった現代の大衆文化や科学技術に関する用語は、改革の方向性から見て、むしろ体系化して学ばせる配慮が必要だろう。

評者は問題の多い提起だと考える。生徒が「読んだことのない文学作品」や「作品を読んだことのない作家の名前」を「排除」とすると、世界史には何が残るのだろうか。教師が「読んだことのない文学作品」や「作家の名前」を排除すると何が残るのだろうか。こうやって狭めていけば、極論すると何も残らないということにならないか¹⁴。そのことを理由として「入試と教科書の両面で排除すべき」と断言するのには驚いた。さらに「「教養」の内容が古い」とは、オーセンティックなカルチャーの意義を理解できないうらしく、歴史的に価値の定まらない「現代の大衆文化や科学技術に関する用語」を「体系化して学ばせる」ことを主張する¹⁵。そのようなことを、回答者は求めているのだろうか。以下、意見を評者なりに整理して検討し

てみたい。

	A. 文化史用語の限定に賛成・条件付き賛成意見の自由記述の概要	B. 文化史用語の限定に関する反対・条件付き反対意見の自由記述の概要
1	17)文化史用語大胆に削るべき	4)作品・作家の限定には反対 5)国家による統制になるので反対 6)文化史軽視助長の危険あり 7)教科書のリストむしろ増やし、入試には出さないのがよい 10)文化史用語は巻末などの参考や資料集掲載でよい(5) 11)作家名・作品名を問う入試問題を止めるべき(3) ----- 14)西洋文化中心の是正を
2	1)歴史事象との関連で文化扱うべき(7) 10)文化の政治・経済への影響にも注目を(5) 14)各時代の文化的特徴の中に位置づけを(3)	12)各時代の政治・経済と結び付けること難しい
3	2)作家・作品の羅列でなく、生徒に知ってほしいものを選別し、説明はよい(10) 8)作品の引用がよい(2) 15)文化は暗記でなく、鑑賞を(3) 5)生徒が興味持てるものの工夫を ----- 6)主観的基準での選別避けるべき(5) 11)時代により取り上げる作家・作品の多寡であることへの配慮必要 18)時代を代表する作品・作家選びは難しい、教科書執筆者の力量問われる(2) 20)選定基準明確にすべき(3)	1)用語羅列でも後の関心喚起の入り口になる(2) 3)選定基準が主観的になる危険あり、羅列で可(7) 15)時代を代表する作家・作品の選定困難
4	3)国語など他教科と分業を(6)	8)文学史は国語でやればよい(8)
5	7)宗教・思想部分の補強を 12)羅列でなく、芸術史として教授を 13)系統的科学史の補充も 16)テーマ学習で充実を	2)文系学生には文化史きちんと教えるべき 13)文学・芸術以外も取り上げるべき
6	4)討論型授業の実現のためよい 19)思考力育成と結びつけて(2)	
7	9)生徒の独習促すのがよい(2)	9)課外の読書指導がよい

自由記述であるから、微妙な心情を記しており、賛成と反対が逆ではないかと感じるものもある。〔1〕の反対の側の意見も微妙である。〔2〕の項目の文化を歴史事象・政治・経済との関連の中で位置付けていく、という考えに基づく精選、という当たりが主流とみるが、異見もある。こうした異見をきちんと詰めていくと、興味深い議論になるように思う。〔3〕では、一見すると、羅列否定の論調が優勢なように見える。しかし「選定」に対する困難の指摘があり、基準の明確化を求める意見もある。こうした点を具体的にどう詰めるかだろう。〔4〕「国語」という意見は、世界の文学を視野に置いているだろうか。評者には難しいように感じる。〔5〕は、どちらかという補強・重視の見解のように見える。〔6〕は新しい視点ではないか。実践を踏まえて、教科書作りの観点に盛り込んでいくべきであろう。〔7〕も限られた時間の中で文化史を活性化させようとするものである。

そもそも意見は「文化史用語の限定」についてである。「排除」についてではない。評者は高大研の提起は、こうした記述を参考にしてなされたものなのだろうか、と疑問を感じる。シンポジウムに際して感じた違和感、「ご案内」の語に対して感じた違和感は、こうした個別の

意見に寄り添わず、アンケートの結果を自分たちの主張に利用しようとする強引さに対する違和感であったようである。

おわりに

評者は、今回の高大研の「提案」を問題の多いものとみる。高大研は「責任」を負うことを主張して学術会議・日歴協側を説得したようであるが、学術会議・日歴協もきちんと対応して、三者で客観性の高い分析をおこなうべきであった。評者の見るところでは、学術会議・日歴協も責任を免れない。また高大研の「提案」は、その作成経緯からして「合意」を得たものとは言いがたく、内容的にも首肯しがたい。そもそもアンケートを利用して、自分たちの考えを通そうとする思惑が前面に出てしまっているのは、一層の不信を煽るだけであろう。

評者の教員としての経験から考えてみて、教員の中に多様な考え方のあることは明らかである。多様な学校の現実がある。評者は、純粋な進学校には、ごく短期間在籍しただけであり、どちらかという、困難な学校、普通の学校において、多様な生徒の志向に接してきた。同僚の教員も多様であった。そうした経験に照らしてみても、多様な意見になるのは当然の帰結ともみえる。研究者・大学入試問題の出題者といっても、背負っているものはかなり異なるようである。大学の多様性を考えれば、一目瞭然ではないか。さらに教員以外の方々の学校批判、教員批判の潮流は強い。こうした学校批判、教員批判は、一教員としてみると、実態からかけ離れた理不尽な感情論に見えて、困惑することもある。しかし背景に、学校・教員に対する願いが込められている場合が多いことも踏まえておかねばならない。こうしてみると、対立する意見があるのが通常のもので、多数決で決するというような発想に立つべきではない。高大研のアンケートのような、数を頼んで方向性を決しようとする性急な手法ではなく、丁寧に「合意」点を探ることが必用なのであろう。

冒頭に掲げた「藪」の議論。漸くたどり着いた三人目の医師は、まず手で脈を取り、「少し速いね」と言って、それから診断に入った。高大研も患者たる歴史教育の脈を取り、実際に寄り添うところからやり直していただきたいものである。

-
- 1 拙評「もっと議論を……—「シンポジウム：歴史教育の未来を拓くⅢ—歴史教育改革の具体像—」の議論に接して—」（『教育社会史史料研究』13、2018.4）参照。
 - 2 http://www.kodairen.u-ryukyu.ac.jp/pdf/questionnaire_results.pdf、2018.5.5閲覧。
 - 3 前掲拙評「もっと議論を……」参照。
 - 4 評者は、問題のあるアンケートだと思う。そのことについては別稿においても意見を記しており、屋上屋を重ねるようなことはしたくない。そもそも評者は統計に関する専門家ではなく、できたら統計学の専門家の見解をうかがえないものかと考えている。
 - 5 順番では、学術会議・日歴協・高大研の順。順番に序列はないかもしれないが、経緯と権威から見て、学術会議を前面に出している意義は小さくない。それだけ責任も大きいということである。まさか「名前貸し」のようなことはしないだろう。
 - 6 そもそも学術会議から発した流れのものであり、まったく状況を理解していないなどということはない。
 - 7 学術会議は「平成30年2月9日」付けで「「用語精選案（第一次）」の作成と日本学術会議との関係につき、お問い合わせがありましたので、説明します」（<http://www.scj.go.jp/topnews0208.pdf>、2018.5.18閲覧）として、「この「用語精選案（第一次）」は「高大連携歴史教育研究会」が独自に作成したものであり、日本学術会議は作成に関与していません。今後、「高大連携歴史教育研究会」が作成する予定の「用語精選案（最終版）」にも、日本学術会議が関与することはありません。／また、「高大連携歴史教育研究会」が行っている「高等学校歴史教科書・大学入試出題用語精選基準に関するアンケート調査のお願い」には、日本学術会議も名を連ねています。これは、関係者の意向の分布等を確認することにより、高校の学習や大学入試に必要と考える用語数の量的な水準に係る、今後の日本学術会議における議論の参考になると考えたからです。日本学術会議としては、「用語精選案（第一次）」

を支援・推奨する意図はありません」とする文書を公表してる。アンケートの締め切りを前に公表されたこの見解は、アンケートを募集する高大研のHP等では周知されなかったのではないか。またその後三者の集まりに際して、学術会議・日歴協側の代表がどのような立場の人物か、どのような権限を持って参加したのかは存じない。ただ、これほどの重要事項なら、一度持ち帰って検討すべき内容だったのではないだろうか。

- 8 <http://kodairekikyo.blogspot.jp/2018/02/blog-post.html>、2018.5.5閲覧。
- 9 なお、「高校と大学教員に限ると、過半数を超えていたことが判明した。そのため、高大研の提案の中に、用語精選基準として新たに追加することはしないが、その事実の指摘を追加することにした」とする記述も注視すべきかもしれない。高校・大学教員と一般の方々との間に溝のあるということなのだろう。その溝こそ重視すべきではないのだろうか。
- 10 拙評「[精選]に名を借りた新たな[暗記]用語の提案の問題点—高大連携歴史教育研究会編「高等学校教科書および大学入試における歴史系用語精選の提案（第一次）」の「世界史」領域案について、特に中国明代を事例として—」(『教育社会史史料研究』13、2018.4) 註13等参照。
- 11 なおXの自由記述欄を見ると、少し異なる解釈もできそうである。大きな数を示しているものは次の三つである。

[1]	[2]	[3]
100)事実に基づく教育を(29)	101)イデオロギーに偏った教育反対(33)	104)自虐でなく、日本に誇り持てる歴史教育を(33)

この三つも必ずしも相反するものとは言い難い。私見では共存可能なものである。この三つの意見を斟酌して穏当な教科書を構想することを目指すべきではないか。

- 12 高大連携歴史教育研究会第4回大会(2018.7.28/29、於愛知工業大学附属中学校)シンポジウム2B「歴史的思考力と用語精選・教科書の刷新」において、「[+第一]は「史実との違いを示す」としています。あの用語精選案への批判を理解できていないのではないですか。坂本龍馬の史上の意義を理解せず、「漢学」の意義・機能を理解せず、非常に主観的、権威的な上から目線で切って捨てたことへの批判です。その批判を「誤解」と言いつくろうのは、何処かの政権に似ていると思います。こうした方針に基づくと、たとえば坂本龍馬について、どう書くのか教えてください」/「[+第二]は、「外国の見解も示す」としています。近現代史に関する「外国の見解」は、日本のものもだめですが、それ以上に、非学問的で、感情的で、政治的なものが多いです。「あくまで学問的な成果に基づくべき」という見解と矛盾するのではないですか。見解を御願います」と質問した。ただし、既に運営委員会で決定したこととして、一切回答はなかった。
- 13 前掲拙評「もっと議論を…」において、「ご案内」に関する疑念を表明している。
- 14 評者は、少年用の世界文学全集などをかなり読んでおり、内容は忘れてしまっているが読んだことは記憶にある。一方日本文学はほとんど読んでいない。また、評者の欠点はクラシック音楽。残念ながら演歌の家である。教師でもかなり個人差のあることだと思う。
- 15 そもそもサブ=カルチャーを体系化できるのだろうか。個人的には見てみたい気もする。また歴史の専門家がどのようにしてわかりもしない科学技術を体系的に教えるのだろうか。少なくとも評者には無理である。

(2018.5.10/5.18/7.30補訂)